

社会思想双方において、自らの言語を浄化しようとする動きもある。しかし、プラグマティックな免疫学者や哲学者は、自分の言語が拡大解釈的に見えるとわかりつつ言語を純化しない。哲学者たちは、こうした「自然主義的誤謬」の糾弾自体が自然と社会を二極化させる近代の誤謬であり、自分たちはほんとうは共通の知的文化のうちにいるとわかっているからだ。

以上で各論考の概要を紹介してきたが、ここからわれわれはどのような教訓を得ることができるだろうか。一つには、自然主義的誤謬という概念のなかに潜む、自然と道徳を峻別する視点に立った歴史記述には注意しなければならないということが挙げられるだろう。Holmesが述べているように、ギリシャ・ローマ時代の哲学者たちはみな、自然に従って生きることが善いことだとみなしていた。Dastonの論考によれば、自然の領域と人間の領域のあいだにはっきりした線が引かれたのは19世紀のことであり、自然主義的誤謬という概念は現代的なものなのである。だがわれわれは、古代や中世、近世の歴史を記述する際に、自然と道徳は本来的に別の領域であるという前提に立ってしまっていないだろうか。たとえば、昔の論者がある道徳的主張をレトリックによって自然から導出した、とわれわれが述べる時、そのような前提に立ってしまっている恐れがある。そこでいう自然とは19世紀以来の、価値から切り離された自然であり、そのような記述は自然と道徳がより一体的であった当時の視点に立てていないのではなからうか。

本特集のように自然主義的誤謬の歴史を振り返ってみると、それが古代から現代に至るまで軌効に存続していることの「奇妙さ」に目が向いてしまうかもしれない。しかし、その奇妙さ自体を問うよりも、むしろわれわれが何故それを奇妙に感じるのかということのほうが必要なのではないだろうか。自然主義的誤謬を「誤謬」とみなすわれわれ自身の歴史的な立ち位置に反省の目を向けることで、自然主義についての歴史記述はより実りあるものになるであろう。

東京大学科学史・科学哲学研究室に所属する大学院生を中心として、2011年度から定期的に *Isis* の特集記事を読む研究会を開催している。本記事は、2014年12月の同研究会に参加された方々の意見に多くを負っている。

(中尾暁, 坂本邦暢, 平井正人,
丸山隆一, 霜川優, 片岡雅知)

特集「人種を再定位する」*Isis* 105 (2014): 759-814.

科学・技術・医学史の国際誌 *Isis* は、各号で“Focus”という特集を組んでいる。本稿では、2014年第4号に掲載された「人種を再定位する Relocating Race」という特集を紹介する。以下は、本特集に所収された各論考の概要である。

Suman Seth, “Introduction”

Suman Sethによるイントロダクションは、Nancy Stepanによる著名な研究「科学における人種概念」(*The Idea of Race in Science*, 1982)と対比する形で本特集を特徴づける。Stepanが描いた人種概念の歴史は、ディシプリン、地域、時代の三つの軸において偏りがあるといえる。たとえば地域の軸では、異なる「人種」の人々と日常的に接触していた植民地の人間を扱わずに、もっぱらヨーロッパの大都市にいた学者たちに焦点を当てている。そこで本特集の各論考は、この三つの軸のどれかにおいて「人種」を再定位するのである。たとえばSeth自身の論考は、地域と時代の軸に着目し、18世紀の西インド諸島における「人種」を検討する。異なるディシプリン、地域、時代が、どのようにして、異なる人種の思考の表現を要請し形成してきたのかを探ることで、われわれは、従来の主要な検証対象となってきた19世紀ヨーロッパの人種科学を生み出した条件についても再考することができるのである。

Suman Seth, “Materialism, Slavery, and *The History of Jamaica*”

Suman Sethの論考では、ジャマイカの農場経営者であるEdward Long(1734-1813)が、【ジャマイカの歴史】(*History of Jamaica*, 1774)で明らかにした人種思想が検討される。Longは、我々にとって馴染み深い19世紀の人種多起源説(polygenism)とは異なる独自の説を展開していた。例えばLongは「黒人女性が雄のオランウータンと結婚できる」と主張したが、それはいずれも同じ「人間」に分類されるとLongが前提していたからだっ

た。また Long は、気候の多様性は人種のあり方に決定的な影響を及ぼさないとしつつも、異なる人種間の混血がもたらす影響力の大きさを強調した。さらに人種間の違いは、脳の構造上の違いといった物質的なものではなく、神が設けた本質上の違いという精神的なものである。以上のように Long の思想は、唯物論を基調とする 19 世紀の多起源説とは一線を画しているばかりか、一見、思想としての整合性に欠けているようにさえ思われる。しかし著者によれば、Long の思想のわかりにくさは、彼の社会的背景を鑑みることによって理解される。奴隷農場の経営者である Long が危惧したことは、頻発していた奴隷の反乱であった。そこで Long は自らの人種思想によって、その解決策を打ち出そうとした。Long の見解によれば、黒人は蜂起の可能性が高いが、混血であるクレオールは黒人から本質そのものが容容している。それゆえ、Long は黒人とクレオールを人種的に区別して扱うべきだと主張した。このように著者は、従来までの研究では明らかにされなかった周縁部の人種思想の多様性を浮き彫りにする事例として、Long の思想を描き出している。

Helen Tilley, "Racial Science, Geopolitics, and Empires: Paradoxes of Power"

Helen Tilley の論考は、人種の純粋性や階層性に関する理論に対する批判が 20 世紀初頭にはすでに大きくなっていったことを指摘する。そのような批判は 1911 年にロンドンで開催された世界人種会議 (The Universal Races Congress, URC) の参加者、すなわち人類学者や各国の政府代表にも共有されていた。白人が他の人種よりも優れているという理由によって植民地支配を正当化しようとしてきた者たちは、自らが前提としていた人種理論が批判されたために、人種の差異に訴えた植民地支配の理由付けができなくなってしまった。ただし、20 世紀初頭の人種理論に対する批判があったにもかかわらず、第二次大戦期には優生学が隆盛を極めることになる。そこで著者はこのパラドックスの背景として、URC に参加した人類学者たちのアンビバレントな姿勢に注目する。たとえば、人類学者 Felix von Luschan (1854-1924) は人種の純粋性・階層性の誤りを認める反面、人種に関する研究の意義は否定しなかった。そのときに Luschan が提案したのが、生物学的差異や歴史的進化に注目した人種理論であった。これまでの科学史研究上で多くの注目を浴びてきた第二次大戦期の優生学に関する研究は、

今後、20 世紀初頭に存在した人種理論に対する批判とあわせて検討される必要があるだろう。

Warwick Anderson, "Racial Conceptions in the Global South"

Warwick Anderson によれば、人種科学という分野は、北半球におけるそれがあたかも世界的に通用するかのよう捉えられてきた。学術知としての人種科学からそれが政策や人々の生活に及ぼす影響まで、我々は北半球において生じてきた差別、隔離、優生政策といった事象を前提に考えてきた。しかしここで、これまで人種科学の対象とはされてきたものの、人種科学を生み出す場所とはされてこなかった南半球に着目する必要があるだろう。一例を挙げるなら、南半球における人種科学やそれに基づく政策は、北半球のそれよりも「柔軟性 plasticity」を持っていると指摘できる。具体的には、ニュージーランドやラテンアメリカにおいて混血の優位性を評価するような研究がみられることなどがその証拠として挙げられよう。この例に象徴されるような南半球における人種科学のダイナミズムを明らかにするためには、20 世紀初頭の人種科学にまつわる文献を整理し、歴史的・比較社会的な分析を行う必要がある。その営みは最終的に、これまで「規範的 normative」なものとして機能してきた北半球起源の人種科学を相対化することにもつながるかもしれない。

Yuehtsen Juliette Chung, "Better Science and Better Race?: Social Darwinism and Chinese Eugenics"

Yuehtsen Juliette Chung (鍾月岑) の論考は、中国の人種観を優生思想の視点から分析している。中国や日本は 19 世紀末から優生思想を取り入れたが、その目的は欧米列強の人種差別への抵抗だった。20 世紀初頭の日本では、自然淘汰説がヤマト民族のアジア進出を正当化する目的で利用された一方で、中国では国家が単一の民族で成り立つべきという議論と、複数民族の融和を奨励する議論が同居していた。民族融和の立場を取った中国優生学の中心人物 Pan Guangdan (潘光旦 1899-1967) は優生学を科学の一分野と見なし、人種の階層性を否定して少数民族との融和を説いた。中国優生学は「中国人」であることを保ちつつ世界情勢に適應する方法を模索する中で、国家の結束を固めるため異民族間結婚を奨励したり、国力増強のため中絶禁止を掲げたりした。第二次世

界大戦後、中国は国際的にはタブーとなっていた「優生学」を再び取り上げ、一人っ子政策や地方での強制中絶を積極的に行った。一方で都市部では、優生学が「より良い妊娠のため」という名目で普及している。このように、欧米では優生学と保守主義のつながりがしばしば強調されてきたが、本論考は、中国では優生学がむしろ進歩主義と強く関連づけられてきたという事実を明らかにした。

Duana Fullwiley, "The "Contemporary Synthesis": When Politically Inclusive Genomic Science Relies on Biological Notions of Race"

Duana Fullwiley の論考は、近年の米国の遺伝学における新しい潮流を報告している。人種によって健康の遺伝的基盤も異なるという古いタイプの議論と、マイノリティの人々についての医学研究を重視すべきだというリベラルな主張が結び付き、人種による遺伝的な違いについての研究が加速しているのである。この新しい人種科学は、医療や犯罪捜査、教育やレジャーなどの様々な場面で人々の生活に直接関わりつつある。たとえば、DNA を用いて個人の遺伝的祖先を調査するビジネスが勃興しており、そこでは「あなたの祖先は 40% がヨーロッパ人、25% がアフリカ人、……」などといった形の判定がなされている。ゲノム科学が「人種」と呼べるような科学的分類は存在しないことを示したにもかかわらず、人々の遺伝的な違いが従来通りの政治的・社会的な人種分類に結び付けられているのである。以上のような新しい潮流は、進化論において人種概念を後景化させた「現代的総合 modern synthesis」と対比して、「今日の総合 contemporary synthesis」と呼ぶことができるだろう。今日の総合における人種研究は、人種差別を正当化する主張の根拠に用いられることもあれば、過去の人種差別を克服しようとする試みに用いられることもある。人種分類を復権させる可能性と脱構築する可能性の両方を秘めている、諸刃の剣なのである。

以上が各論考の概要である。最後に本特集から提起で

きる論点を二つ挙げたい。まず、人種研究に多様な切り取り方と発見の可能性があることが示された。具体的には、列強による植民地支配と固定的な人種観が必ずしも単純に結びついていたわけではなく、18 世紀ジャマイカの農場経営者の人種多起源説は 19 世紀のヨーロッパのものとは大きく異なっていたし、20 世紀初頭の欧米の人種学者や政府代表は人種の階層性に懐疑的だった。これらの例は、統治者側の人種観に関する新しい指摘であり、今後も探究の余地があるだろう。また、南米やアジアでどのように人種観が利用されたかという事例紹介は、Seth がイントロダクションで指摘した、従来の歴史研究における地域の「偏り」を解消する試みであり、一義的に人種や優生思想を語るができないことを示唆している。

更に、将来の「人種」のあり方も注目すべき点である。Fullwiley はゲノム研究に基づく新たな人種科学を示し、医学において人種という分類をしないことが、逆にマイノリティの無視や抹殺に繋がるという意見を紹介した。実際に米国では、アフリカ系アメリカ人にのみ有効であるとして処方認められた薬 (BiDil) が存在している。しかし、ゲノム研究的な人種科学が台頭しているからといって、今後の人種概念が遺伝学に基づくものに変容していくだろうとは言いきれない。人種は生活する地域や、容姿の類似性による見分けやすさなどにより、未だに集団アイデンティティの基盤として機能しているからである。だがそれにしても、遺伝子という、表面に表れない人間の性質についての理解が進むことで、人間そのもののカテゴリー分けである「人種」にもたらされる影響には、引き続き注視する必要があるだろう。

東京大学科学史・科学哲学研究室に所属する大学院生を中心として、2011 年度から定期的に *Isis* の特集記事を読む研究会を開催している。本記事は、2015 年 2 月の同研究会に参加された方々の意見に多くを負っている。

(佐藤桃子, 平井正人, 藤本大士,
森脇江介, 中尾暁)

KAGAKUSHI

The Journal of the Japanese Society
for the History of Chemistry

Volume 42 Number 3 2015
(Number 152)

CONTENTS

SURVEY

Yuuichi MIURA, Tokusaburo Iwase and Shuichiro Ochi: Ammonia Soda Industry in the History of Tokuyama Corporation 117 (1)

Mariko KOMATSU, Visible History and Invisible History: History of Gynecology and Midwifery 131 (15)

FORUM

Masanori KAJI, Mari YAMAGUCHI and Masanori WADA, Reports on the International Workshop on the History of Chemistry 2015 in Tokyo 155 (39)

REVIEWS

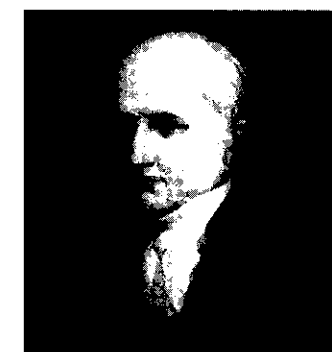
165 (49)

化学史研究

第42巻 第3号 2015年

(通巻第152号)

総説	岩瀬徳三郎と越智主一郎——トクヤマにおけるアンモニア法ソーダ工業史——	三浦勇一	117 (1)
	見える歴史と見えない歴史によせて：産婦人科学と産婆術の歴史	小松真理子	131 (15)
広場	国際化学史ワークショップ (IWHC 2015 in Tokyo) 開催報告	梶雅範	155 (39)
	国際化学史ワークショップ (IWHC 2015) 参加報告	山口まり	162 (46)
	国際化学史ワークショップ IWHC 2015 報告記	和田正法	163 (47)
紹介	ISIS(2014) 特集「ニューロ・ヒストリー (神経歴史学) と科学史」	片岡雅知・脇本圭輔・飯島和樹・霜川優・坂本邦暢	165 (49)
	ISIS(2014) 特集「海洋を知る：科学史における役割」	片岡雅知・藤本大士・中尾暁・住田朋久	167 (51)
	ISIS(2014) 特集「自然主義的誤謬の奇妙な存続」	中尾暁・坂本邦暢・平井正人・丸山隆一・霜川優・片岡雅知	169 (53)
	ISIS(2014) 特集「人種を再定位する」	佐藤桃子・平井正人・藤本大士・森脇江介・中尾暁	171 (55)



プラウト (William Prout, 1785-1850)

化学史学会

Edited and Published by
The Japanese Society for the History of Chemistry
c/o Prof. Akira Yoshida, Meiji University,
School of Political Science and Economics,
1-9-1, Eifuku, Suginami-ku, Tokyo, 168-8555 JAPAN
Overseas Distributor: Maruzen Co. Ltd.,
P.O. Box 5050, Tokyo International, Tokyo 100-3199 JAPAN